

いのちと地域を守る

日頃の交流 自立手助け

学生、継続的な支援策探る



名取市内の仮設住宅の集会議場で、被災者との交流イベントに参加する尚綱学院大の学生たち(中央奥)＝2014年8月

尚綱学院大の学生有志は震災以降、名取市を拠点に復旧、復興のボランティア活動を続けています。発生直後は社会福祉協議会と連携して、津波被害を受けた沿岸部の民家の泥のかき出しや、支援物資の仕分けなどに関わった。避難所の閉鎖後は仮設住宅での被災者支援に力を入れている。

た。日頃の触れ合いを重視し、仮設住宅の畑や花壇を造るのを手伝ったり、一緒に散歩するなどしている。住民が仮設住宅から外に出る機会をつくるため、大学を会場にしたイベントの企画にも取り組む。

仮設でボランティア

【要援護者の所在確認】お年寄りや体の不自由な人がどこにいるか、自分のできる範囲で把握しておきたい。町内会などを通じて接点をつくれるのではないかな。

【要援護者の所在確認】中学校の避難訓練では、自宅から学校に向かう途中、お年寄りの世帯を訪ね「大丈夫ですか」と声をかけた。安全確認の訓練になった。

【要援護者の所在確認】子どものころは地域のお祭りが、近所のお年寄りと話したり、遊んだりする機会になった。お互いに顔が分かり、震災時もお互いに役に立つたと思う。

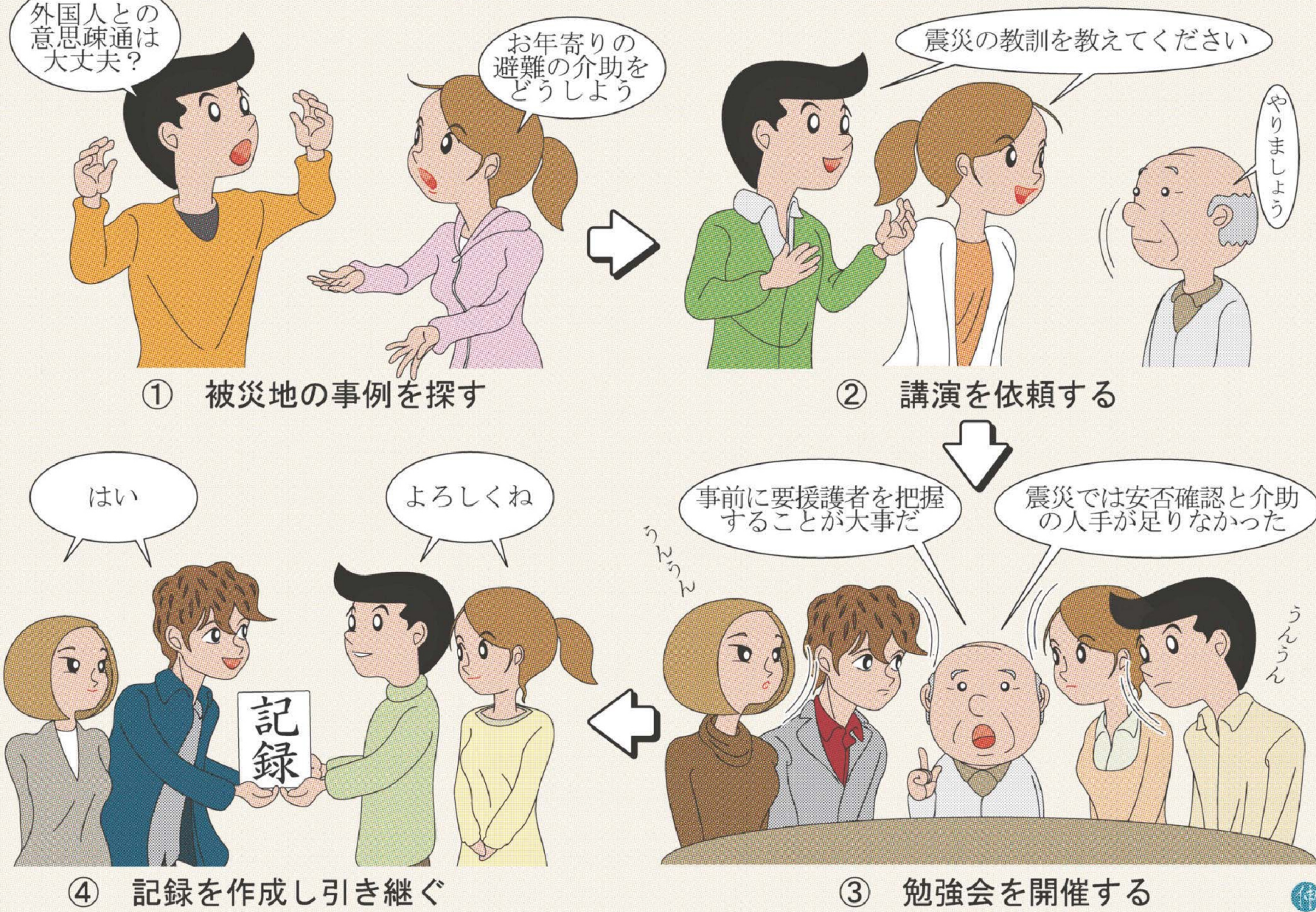
【普段の交流について】私の住む地域では、地区ごとにチームをつくり運動会に参加していた。子どもから大人、お年寄りまで縦のつながりがあり、近所の人の顔を知る良い機会だった。

【普段の交流について】お祭りなど地域の行事のときに、オリジナルの歌や踊りをみんなで作って披露してはどうか。自然にコミュニケーションが取れる関係性を築けるのではないかな。

【普段の交流について】冬に自宅前や近所の道路を雪かきしていると、近所の人が出てきて「ありがとう」と言ってくれる。私もあいさつを返しているが、それが交流のきっかけになると感じた。

【参加して】聴覚障害者は、電話で真つ暗闇の中では目が見えず、何も頼れないという話を聞き、あらためて大変さを認識した。簡単なことなのに、気が付いていない人がたくさんある。

学生自らが防災・減災の勉強会を企画しよう



長期テーマ掲げ経年調査を

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

減災・復興支援機構理事長

木村 拓郎さん



■むすび塾に参加して

名取・尚綱学院大